

# ボルトを投げる

北野勇作

マイ・スタンダードSF

『ストーリーカー』

【ボルトを投げる】

映画が先だ。がつんと食らって梅田の地下の映画館から鼻息も荒く出てきたときには、もうすっかりその気でボルトを投げていた。いや、もちろん頭の中で投げたのだ。ありもしないボルトを投げながら梅田地下をオデッセイする方向音痴の学生だ。

それから頭の中でボルトを投げ続けた。見慣れた光景がそれだけで異世界に変わる。こんな便利なことはない。道を歩くたびに投げていたが、行動範囲が極端に狭いせい、すぐに投げるところがなくなってしまった。

小説を読んだのはだいぶあとだ。なぜもっと早く読まなかったのか、と問うより、なぜ読んだのか、と問うべきだろう。べきかどうかはともかく、それなら答えることができる。ひさしぶりに本屋で投げてみたボルトが、たまたまその本に当たったのだ。

当然ながら、その小説の主人公もボルトを投げていた。長らくボルトを投げ続けてきた者として、他人事とは思えない。忘れていたことを思い出すように読んだ。そしておかげで、まだボルトを投げていない場所を見つけることができた。

どこにも同じように投げなければいけない。ようやくそのことに気がついた。いや、思い出した。

その頃の私はもう学生ではなく、薄暗い倉庫の中でフォークリフトに乗って荷物を上げ下げしたり、仕事を終えての帰り道に喫茶店で小説みたいなものを書いたりしていた。

そうかそうか、倉庫の中でも喫茶店のテーブルの上でも、同じようにボルトを投げ続けなければいけないのか。

小説の中の「あのガキっぽいことば」によって、そんな当たり前のことによろやく私は気づいたわけだ。いや、思い出しただけか。

(SFマガジン2011年10月号)